

悪 霊 第十部・取り憑かれし者たち

悪
霊
第十部・取り憑かれし者たち

【登場人物】

- 伊集院満枝……………北海道H市の地主の娘。川奈産業の大株主
安西小百合……………満枝とはI高等女学校の一年後輩。孤兒院建設に奔走する
猪俣佐和子……………元党員。上海で工作運動に従事。活動名・梅梅ハナハナ
飯島貴代美……………元党中央委員。上海で工作運動に従事。活動名・芳芳フアンフアン
金沢文子……………貧民窟に暮らす少女
佳代……………貧しい農家の娘。安藤邸の女中
韓愛子ハンエジャ……………元玉ノ井の娼婦。日本での源氏名はまち子
李麗姫イヨヒ……………元女性抗日パルチザン。満枝の協力者
篠原ヨシ……………伊集院家の使用人
初代……………津島の妻。元弘前の芸者
ミス・スメドレー……………上海在住のアメリカ人ジャーナリスト。
佐藤碧子……………菊池の秘書
小沼健吾……………元伊集院家の小作人。左翼運動から転向して国家主義者に
宮様……………陸軍大尉。参謀本部作戦課付
安藤澄……………東京帝国大学国史科助教授。安藤浄海の息子
北一輝……………国家主義者
馬海松……………『モダン日本』編集長
菊池寛……………文藝春秋社社長
津島修治……………作家志望の青年

- 山根教授……………弘前高校教授。孤兒院研究の第一人者
倉石……………県会議員
岡沢子爵の令息……………黒襟隊長
思芳……………支那人美少年
仁科中佐……………上海派遣軍将校
倉持英輔……………南京日本総領事館書記生

【時・場所】

昭和八年（一九三三）十二月～昭和九年六月。東京、弘前、北海道H市、上海、南京。

上海。

昭和九年の春から夏にかけて、支那大陸は小康状態だった。昭和六年の満州事変、翌年の満州建国、上海事変、翌々年の熱河作戦と続いた日支間の軍事衝突が終息してから一年が過ぎようとしている。

目抜き通りに聳え立ち、ネオンサインの飾られた大看板を掲げる「レストラン」の店内の個室。ほのかな室内灯に照らされ、食べ終わったばかりの皿が並ぶ円卓を囲むように置かれた椅子に、青いチャイナドレスを着た、ほっそりした娘が俯き加減に座っていた。その隣に、背広姿の太った四十男が、娘の肩を抱いて、しきりとかき口説いている。

「なあ、思芳」

娘の肩を抱く男は、日本語で言った。

「今夜こそは、いよいよ覚悟を決めておくれよ。これまで私は、ずいぶんと金を使っただ。贈り物もたくさんした。そろそろ、私の思いに応えてくれてもいい頃だろう」

「そうねえ……」

言われて婉然と微笑む娘の声は、しかし男性のものだった。厚く塗った白粉の下に、かすかにそり残した髭の跡が見える。

「仁科中佐殿」

思芳と呼ばれた少年は、たどたどしい日本語で言った。

「私、きょうだい沢山。父親、病氣。お金、要る」

「わかっておる」

仁科と呼ばれた日本軍中佐は、鼻髭の下の唇を綻ばせ、思芳の頬に押しつけた。

「お前の家族は、わしがちゃんと面倒を見てやる。心配するでない」

そう言いつつ仁科中佐は、思芳を立たせ、チャイナドレスを脱がせた。白い滑らかな肌に覆われたしなやかな四肢が露わになる。全裸になった美少年を椅子に座らせ、貪るように嘗めはじめた。

中佐の舌が少年の股間に達しようとしていた、その時。

バシヤツと音が響き、室内が一瞬、真昼のように明るくなった。

「誰だ！」

中佐が振り向いた時、彼はズボンを膝までおろし、自らの生殖器を露わにしていた。再びバシヤツ音が響き、フラッシュが焚かれた。

清朝時代の水墨画が描かれた衝立の影に、写真機を構えた人が立っていた。この「レストラン」で働く女給たちと同様、髪の毛を結び上げて左右にお団子をつくり、青いチャイナドレスを着た、ほっそりした女性だった。

「貴様、何の真似だ！」

立ち上がり、写真機に向かって突進しようとして、膝までおろしたズボンが邪魔でよろけた。そのむき出しの生殖器を、チャイナドレスの女は、脚をあげて爪先で蹴り上げた。甲高い声を

の奥でひしゃげさせ、仁科中佐は床にうずくまった。

「いいわよ」

仁科中佐を蹴り上げた女は、振り向いてドアに向かって言った。ドアが開き、同じくチャイナドレス姿の大柄な女が現れた。

床にうずくまってみて、仁科中佐を一瞥した女は、部屋の隅で早くも衣服を身につけはじめた思芳少年に向かつて「よくやったわね」と微笑みかけ、財布を投げた。空中で財布を受け取った思芳少年は、にっこり笑って部屋を出て行った。

少年が去っていくのを見届け、大柄な女は、写真機を構えた細身の女に歩み寄り、その肩を抱いて、唇に唇を重ねた。

「戦鬪的技術団にいた頃に身に付けた技が、こんなところで役に立つとは思わなかったわ」

細身の女——猪俣佐和子は呟いた。「黨員」だった事、実は特高警察のスパイだった中央委員の三沢の下で、美人局などをやって資金を稼いでいたことを指していた。

「あの頃、こんなことばかりやっていたの。今、私がやったことを、亡くなった千恵子さんがやってた。そして私が……」

佐和子は顔をあげ、陶然として言った。

「今の貴代美ちゃんの役だった」

「さすが手慣れたもんだね」

大柄な女——飯島貴代美は嬉しげに言い、それから仁科中佐に歩み寄った。

「おっさん、痛いカエ？」

仁科は苦痛に歪む顔を上げ、やっと声を出した。

「き、貴様ら……何者だ……」

「何者だって、いいじゃねエか。写真はばっちり撮らせていただいたぜ。支那駐屯軍高級参謀の仁科中佐殿が、事もあるうに菜館の個室で、支那人美少年を口説いてたんだ、かっこうのゴシップさ。英米の新聞が飛びつくだろうね」

「グルだったのか……」

仁科中佐は肩を落として悔しげに呻き、やがて問うた。

「貴様らは、日本人なのだろう？」

「生まれ育ったのは日本サ」

「日本人の女とあろう者が、なぜこんな真似をする？ 支那服なんぞ着おつて、敵のスパイか？」

「おっさん、勘違いしてんじゃねエぞ」

言うなり、貴代美は仁科中佐の頬に回し蹴りを浴びせた。仁科は仰向けに倒れた。大きく開かれた股間に、貴代美は踵を打ち込んだ。仁科は両手で股間を押さえ、涙を流して泣き叫びながら転げまわった。

「質問はあたいたちがやる。あんたは正直に答えりゃいいんだ」

二時間後。

上海一の高層建築である十九階建ての五つ星ホテル、百老匯大廈のロビーで、アールデコ調のワンピース姿に着替えた飯島貴代美がソファに腰をおろし、人待ち顔で煙草を吹かしてい

た。つと、正面玄関の回転ドアをくぐり、白いスーツに身を包んだ紳士が現れ、なにげなく挨拶しながら、貴代美と同じソファに座った。

「はい、お土産よ」

流暢な中国語で話ながら、貴代美は懐から取り出した紙片を紳士に渡した。紳士はしばし紙片に見入っていたが、やがて感嘆したふうに溜息をついた。

「さすがは芳芳だ」

紳士は貴代美を活動名で呼び、さらに付け加えた。ボスが言っていたぜ。リヒャルトは本当に優秀な人材を上海に送ってくれた。とても感謝している、と。

「どういたしまして」

軽く頭をさげてから貴代美は言った。そうそう、あなたたちの所にいる文英^{ウエイイン}って奴、日本軍のスパイらしいわよ。

「やはり、そうか……」

紳士は頷き、奴もおしまいだな、と呟きながら腰をあげ、去っていった。

新聞記者を装ってソ連のためにスパイ活動を展開するドイツ人リヒャルトの斡旋^{あつせん}で、貴代美と佐和子が上海に渡ってから半年が過ぎようとしていた。当時の支那共産党は、蔣介石率いる国民政府との抗争に敗れ、瑞金に根拠地を移していた。上海の共産党組織も徹底的な弾圧で壊滅状態にあったが、リヒャルトが外国人租界地に築いたスパイ網はほぼ無疵^{むし}だった。貴代美と佐和子はその一員として、日本をはじめ各国の情報を集め、ソ連や支那共産党の戦略をたてる助けを担っていたのである。

「ヤアと」

帰って寝るか。日本語で呟き、両手を突き上げて伸びをしながら、貴代美は立ち上がった。

同じ頃。

「梅梅」

顔をあげた猪俣佐和子の視線の先に、四十歳くらいの黒髪の白人女性が立っていた。

共同租界（外国人居住区）内にあるカフェ。清楚な洋装に身を包み、部屋の隅のテーブルに独り腰かけていた佐和子は小首を折って笑顔を作った。「梅梅」は、佐和子の活動名である。

「May I sit down?」

軽く腰を折って挨拶する白人女性に、佐和子は微笑んで頷いた。

「こんにちは、ミス・スメドレー」

Have you finished your job?（お仕事は終わったの?）。給仕にコーヒーを頼んでから、スメドレーと呼ばれた白人女性は問うた。アメリカ生まれの女性ジャーナリスト。日本と支那の軍事衝突の前線に飛び込んで取材を続けているが、支那共産党とのつながりを噂され、その首魁である毛沢東と面会できる数少ない外国人であると囁かれていた。

「ええ、もう終わったわ」

佐和子が答えると、スメドレーは小さな紙片をテーブルに置き、kidnap him と短く告げた。

佐和子はちらりと紙をめくった。額が禿げ上がり、薄い鼻髭をはやした、貧相な中年男の顔写真だった。下に「南京日本領事館書記生 倉持英輔」と書き添えてある。

次の任務は、この男の誘拐か……。

男の顔立ちと、その名前をすばやく脳裏に刻み、佐和子は頷いた。スメドレーは写真を灰皿に置き、火をつけた。ぽつと煙が立ち上り、紙片は灰と化した。スメドレーは手短に言った。すぐに南京に行きなさい。電車の中で連絡員と出会えるよう手配します。

連絡員の特徴を告げ、その指示に従うよう言い残し、スメドレーはコーヒーに口をつけぬま去っていった。

南京は当時、蒋介石の国民政府の首都であった。

「最近はずっかり物騒だね」

上海から南京に向かう汽車のなかで、会社員らしい日本人同士が会話をかわしていた。

「藍衣社（らんいしや）というのを知っているかね。蒋介石直属のお庭番みたいな連中だが、政敵を片っ端から暗殺したり、監禁して脅迫することもしばしばらしい。日本人居留区の周囲をうろろして出入りの支那人を捕まえて訊問したり、電話の盗聴をやったりと、なかなか野蛮な連中らしいのだな、これが」

「蒋介石は、新生活運動なんて言い出して、近代化を唱えています。ですが、実態は野蛮なものなんですな」

「そういうことだ。支那の民度なぞ、そんなものだよ」

通路を挟んだ別の座席では、猪俣佐和子と飯島貴代美が、向かい合って座っていた。

「藍衣社かあ」

煙草を吹かしながら、貴代美は言った。支那が曲がりなりにも国民政府の下で統一されてからまだ数年、政府の権威は盤石とは言えず、支那共産党をはじめ、抵抗勢力の動きも根強い。

佐和子は問うた。

「国家保安部（こくわへいあんぶ）や日本の特高みたいなものかしら」

「そうだろうね」

貴代美は声をひそめた。

「じゅうぶん気をつけようね」

ソ連や支那共産党の指示で動いている二人にとって、藍衣社はまさに天敵だった。

汽車は丹陽駅（たんやうえき）に着いた。南京まで約九十キロ手前である。降りる人たちと、新たに乗り込んで来た乗客がごった返し、やがてそれぞれの席に落ち着いた時、貴代美と佐和子の席のそばに人影が立った。詰め襟の中山服（ちゅうざんふく）を来た青年は「丁です」と名乗り、「空いていますか？」と問うた。向かい合っていた佐和子が立ち上がり、貴代美と並んで坐り、丁は向かい合う形で空いた席に腰をおろした。

「よい天気です」

「明日は寒くなるそうです」

それが合言葉だった。丁は深く頷き、それから眼を閉じて居眠りをはじめた。しばらくして汽車は鎮江駅（ちんきやうえき）に着いた。丁は瞼を開けると、慌てたふうに席を立ち、あたふたと汽車を降りた。座席に、紙片が残された。佐和子は何げなく立ち上がり、丁が来る前と同じように貴代美に向か

い合う形で席を移った。坐りながら紙片を手に取り、春用ジャケットのポケットに入れた。

終点である南京駅に着いたのは、一時間後だった。汽車を降りる人並みに揉まれながら、佐和子はポケットから紙片を取り出して見た。南京での二人のアジトとなる家と、ターゲットである倉持の自宅の住所が記してあった。

あれが藍衣社かあ。貴代美は伸びをしながら佐和子に囁きかけた。駅のそこかしこに、藍色の詰め襟を着た目つきの鋭い男達が立っていた。

二日後の夜十時。

南京の日本総領事館の表門は、嚴重に閉められていた。その日の領事館は、つい先ほどまで、今日まで滞在していた日本公使が上海に赴くというので、最後の晚餐や、見送りの用意で大騒ぎだった。黒塗りの公用車に乗った公使一行がすべて駅に向かい、やっと領事館が静寂に包まれてから三十分ほど経っていた。

表門の門衛は、背広のボタンをきちんと止め、山高帽をかぶった男が、領事館の建物から出てくるのを見た。倉持さんか。門衛は通用口の鍵を開け始めた。小学校を卒業した後、十三歳で支那に渡り、さまざまな職を経験しながら独学で支那語を身に付け、四十歳にして正式に領事館書記生となった倉持は、温厚で篤実な人柄ゆえに、領事から下働きにいたるまで、すべての人達に慕われていた。

ご苦労さまです。近づいてきた倉持に門衛が挨拶すると、「やあ、お疲れ様です」とにこやかに山高帽をとってお辞儀した。倉持さんこそお疲れだったでしょう、ゆっくりお休み下さい。そ

う門衛に言われ、再び歯を見せて笑い、通用口をくぐって外に消えた。

領事館を出ると、大きな公園が広がり、公園客目当ての商店が開いている。街灯が瞬き昼のよう

に明るい通りをしばらく歩くと、しだいに店も通行人もまばらになった。尾けられてる……。倉持は、背後に響く規則正しい足音に、そう直感した。ここ数日、尾行がついていることは気づいていた。藍衣社の制服を着ている男であることもあれば、普通の市民を装う目つきの悪い男である事もあった。俺みたいな下っ端したばを尾行しても、何もならんのに。倉持は自嘲気味に思った。

ふと、足音が消えた。振り返ると誰もいない。おかしいな……。しばし立ち止まって周囲を見回してから倉持は歩き出した。

やがて人家は途絶え、原っぱと桑畑に挟まれた暗い道となった。自宅まであと百数十メートル。急ぎ足になった倉持がふと足を止めた。見馴れぬ自動車が、道ばたにとめてある。その影から一人の女が現れた。同時に、背後から重い衝撃が、倉持の股間を襲った。あまりの激痛に両手で股間を押さえた倉持は、よろめいて目の前の女にもたれかかる形となった。女は倉持の両手を掴んで広げさせ、露わになった股間に膝を打ち込んだ。倉持はよろよろと地面にくずおれ、動かなくなった。

「失踪の倉持書記生の行方、いまだ知れず」

「反日分子の陰謀か」

こうした見出しが内外の日本語新聞に踊った。日本の外務省は国民政府に嚴重抗議した。抗議

の声は日本国内でも、現地でも、日に日に高まった。藍衣社が誘拐犯だと決めつけ、反日テロを許すなど日本政府の「弱腰」を批判する与論が高まった。

多くの日本人団体が、国民政府を非難するプラカードや幟のぼりを掲げてそこかしこで示威運動を行った。日本総領事館にも連日、壮士ふうの男たちが押しかけ、国民政府に圧力をかけるよう詰め寄った。「弱腰」と批判されるのを恐れた総領事館は支那駐屯日本軍に要請し、東支那海に停泊していた軍艦を、揚子江を溯さかのぼって内陸の南京まで呼び寄せた。これに対し、国民政府側も市内のそこかしこを軍隊に警備させた。

日本と支那は、今や一触即発だった。

「なぜ、あんな小役人を誘拐したのか、やつと理由わけが分かったよ」

南京市郊外にある隠れ家アジト——中流家庭クラスの民家——の食堂で、新聞紙を広げながら貴代美は言った。

「あの倉持って人、なかなか人望があつたみたいだね。苦学して出世して、奥さんと三人の子供を養つてるんだってサ」

「ちよつと気の毒ね」

台所から茶を盆に乗せて運んできた佐和子は、卓子イブに並べながら言った。

「気の毒だなんて思わないけどサ」

モスクワで訓練を受けた貴代美は、茶を口に運びながら言った。

「こつやつて日本と国民政府の関係を悪化させるのが、瑞金ずいじんの狙いだったんだね」

国民政府は、南京の南南西、約千キロの瑞金に落ち延びた支那共産党の息の根を止めるべく躍

起になつてゐる。満州事変に始まつた日本との軍事衝突を一応終結させたのも、まずは内部を固めたいからだ。しかし、再び日本と軍事衝突すれば、支那共産党に手を出す余裕はなくなる。支那共産党側に見れば、落ち着いて根拠地固めに専心することができるようになるのだ。

扉を叩く音が響いた。佐和子が明けると、十歳くらいの少年だった。卵を届けに来ました。そういう少年から籠を受け取り、お駄賃だちんを渡して帰し、籠かごを卓子に置いた。六個ほど卵を重ねた籠の底に紙片が置いてあった。「倉持は解放し、家を引き払い、東亜飯店のロビーで待て」と書いてあった。貴代美はすばやくマッチを擦すつて紙片を焼き、家の奥へ向かった。狭い小部屋を開けると、倉持が猿ぐつわをはめられ、椅子に縛り付けられていた。怯おそえた目で貴代美を見上げる倉持をじつと見つめ、貴代美は言った。

「あなた、南京に奥さんと子供がゐるんだってな」

倉持の眼が見開かれた。この家に拉致らちして監禁して以来、貴代美も佐和子も、倉持の前では支那服で通し、決して口をきかなかつた。貴代美の口から流れ出る江戸前の日本語に、倉持は混乱した様子だった。

「愛媛の松山には、年とつたおつかさんがゐるんだろ。早くこんなところを出て、家族に会いたいんじゃないのかい？」

倉持の眼から涙が溢れた。懇願するように幾度も頷いた。貴代美は続けた。

「会いたいなら言う事をきくんだ。いいかい？」

顎あごを幾度も動かして応諾の意を現す倉持に、貴代美は言った。これからあなたを釈放する。ちよいと痛い目にあわすけれど、心配しなさんな、殺しはしないから。発見されたら、最初は気が

違つたふりをしろ。手当を受けるだろうから、頃合いをみはからつて正気に戻れ。それからこう言うんだ。あんたは、苦勞して書記生になつたのに、いつまでたつても出世できず、ノイローゼになつていた。嫌気がさして、仕事も家族も放り出したくなり、ここまで彷徨つてきて強盜にあつた。しばらく監禁されていたが、騒ぎが大きくなつたので、強盜はあんたを捨てて逃げた……。」「分かつたかエ？」

念を押す貴代美に、倉持は深々と頭をさげた。

「もし、従わなかつたら、お前の家族全員殺すからな」

眼を見開いた倉持に、ねじこむように貴代美は言つた。

「それから、お前のきんたまをひねり潰し、犬に食わしてやる。あんたの男根を切つて喉に詰め、窒息死させてやる。それでいいのなら、あたいらのことばらせ」

あたいらは、やると言つたらやるよ。貴代美は、背後に立つ佐和子を指して言つた。あたいら、男のきんたまなんて、何十個と潰して来たんだからな。

倉持はがたがたと震えながら、何度も頷いた。失禁していた。

二時間後。

倉持書記生を南京より東の郊外にある孝陵——明の太祖・朱元洪の陵墓——の背面に聳える紫金山の麓に運んで放置し、南京に戻つた貴代美と佐和子は、常になく騒然とした市内の様子に驚いた。市内随一のホテル東亜飯店に向かつて二人は、そこで待つていた連絡員から、驚くべき知らせを聞いた。

日本の軍艦が停泊していた揚子江沿岸で、倉持の誘拐に抗議する日本人居留民数百人と、支那側の抗日団体とがにらみ合つていた。そこに、藍衣社と思われる制服を着込んだ一団が乱入し、日本人居留民に向かつて発砲した。たちまち両者ともみ合いになり、大勢の死者を出す事態となつた。騒擾は市内全域に広がりつつあり、日本軍と支那軍が集結しつつある——。

「おい、その藍衣社の制服着た一団ってサ」

貴代美は、声をひそめて連絡員に問うた。

「まさか、瑞金の差し金じゃねえだらうな？」

連絡員は答えず、お二人はすぐ、瑞金に向かつてください、とだけ告げ、去つていった。佐和子と貴代美は顔を見合わせた。

支那共産党の根拠地から呼び出されたのだ。

(第十部・了)